

夏期長雨・日照不足

8月

水 稲

1 早期栽培（コシヒカリ）

- 1) 収穫適期になれば、速やかに収穫する。この際、落水口を完全にあげ、天候が回復したらすぐにコンバインが入れるよう排水しておき、水尻が少しでも高いと滞水するので、鍬等で排水溝を切って完全落水とする。
- 2) 高水分での収穫となる場合は、コンバインの走行速度を落とすか、あるいは刈り取り条数を減らして収穫作業を行う。
- 3) 倒伏等により穂発芽している場合は、穂発芽粒の混入を最少限に止めるため、無倒伏部分と倒伏部分を別々に収穫・乾燥を行う。
- 4) コンバイン袋内での蒸れや穂発芽を助長しないように、収穫後は直ちに（少なくとも4時間以内）乾燥作業に移る。乾燥初めは通風乾燥として籾水分のむら直しを行った後、熱風乾燥を行う。

2 短期栽培（コシヒカリ）・普通期栽培（中生品種）

- 1) 出穂後10日間までは湛水とし、その後は間断灌水とする。但し、湛水状態が長引いているほ地では、根の活力を維持するため、適宜、間断灌水とする。
- 2) 葉いもちが発生しているほ地では、穂いもちへの移行を防ぐため、出穂前にいもち病に効果のある薬剤で防除する（使用する薬剤により防除時期が異なるので、農薬使用基準に沿って適期に防除すること）。

大 豆

- 1 湿害を受けているので、根腐れや下葉の黄化を防ぐため、排水に努める。
- 2 紫斑病の発生が予想されるので、防除を徹底する。

茶

- 1 炭疽病、もち病が発生しやすく、チャノミドリヒメヨコバイの発生が多い状態が続くので、防除に努める。なお、茶株面をせん枝による更新した園では、葉の硬化が十分でないため、病害予防として銅剤や治療効果のある殺菌剤、秋芽の生育に併せて今後もチャノミドリヒメヨコバイが多くなってくるため殺虫剤の散布も実施する。
- 2 茶園内の畝間の風通しを良くし、病害発生も抑制させるため、裾刈を実施しておく。

野 菜

- 1 栽培中の場合、水が溝にたまった状態になると根腐れが発生しやすいので、排水を徹底する。
- 2 草勢が弱っているため、摘花や摘果等を行い、着果負担を軽減し、葉面散布剤を散布し、草勢回復に努める。
- 3 施設野菜は、雨の後に晴天になると、急激な根の水分変化に対応できないため、極端な萎れや生長点等の焼けが発生しやすくなる。萎れ、生長点等の焼け防止のため、雨の日でも土壌水分を確認し乾燥しているようであれば、午前中に適量かん水を行うとともに、施設を閉め切らず、サイドや入り口を開放して風通しを良くし、多湿状態にならないように管理する。雨天後の晴天日は、早朝に適量の灌水を行うとともに、施設内の温度が急激に上昇しないよう、サイドや谷等を早朝から開放する。また、施設周りに排水溝を掘り、施設への水の流入防止に努める。
- 4 風通し、日当たりが悪いと病害が発生しやすいので、株元や重なっている葉の除去に努める。
- 5 べと病、灰色かび病、炭疽病等の病気が発生しやすい状態になっている。被害拡大防止のため、早期に病葉や病株を除去し、ほ場外へ搬出することが重要である。そして、雨の間の晴天日に、防除暦、防除指針に従い、適期防除に努める。雨天後は、葉等が軟らかく、葉害が発生しやすいので、基準濃度の範囲の薄い濃度（例：2,000～3,000倍の場合、3,000倍）で散布する等、注意して薬剤散布を行う。

- 6 露地栽培のは場準備では、ほ場の乾きが悪く水がたまっている場合は、ほ場全体の耕うんはせず（耕うんすると土壌に水を含み一層乾きにくくなる）、排水溝を設置して（約5 mおきの溝、ほ場周りの溝、落とし口つなぐ溝等）積極的な排水対策を行う。落とし口周辺だけでも溝を掘ると排水しやすくなる。
耕うん可能なほ場条件になってから、耕うんし、うねは出来るだけ高うねにする。すぐに定植しない場合は、基肥を施用してマルチングをすると雑草防止、土壌表面のしまりを防止できる。ほ場周りに排水溝をほり、うねが30 m以上になる場合は中溝をつくるなど排水対策を行う。
- 7 定植後、活着を促すために株元かん水を行う。土壌に十分水分を含んでいる場合、かん水によって水分過多になると徒長気味に生長し、根の張りが悪くなるので、土壌水分が多くならないように土壌水分を確認しながらかん水を行う。（今年は、地下水位が高い状態である。）
- 8 育苗管理では、育苗培土の湿りを確認し、午前中のかん水を実施し、夕方、育苗培土が乾き気味になるようにかん水を行う。

果 樹・オリーブ

1 共通事項

- 1) 長雨による停滞水の影響で根の活力が著しく低下し、樹勢の衰弱や落葉、枯れ枝の発生等が予測される。このような園では、明きよ等により早急に停滞水を排除する。
- 2) 降雨により耕土が流出し、根が露出している場合は、客土等により覆土する。
- 3) 敷き藁を実施している園では、根元に藁を集めて土壌表面からの水分蒸散を図り、品質低下を防止する。また、雑草が生えている場合は、除草を行い、乾燥に努める。
- 4) 病害虫の多発が予想されるので、雨後の薬剤散布を徹底する。

2 柑橘類

- 1) 園内に溝を掘り排水に努めるとともに、断根によって果実品質の向上に努める。
一方、樹勢が衰弱している場合は極端な断根は慎む。
- 2) 褐色腐敗病発生のおそれがある園では防除暦（異常発生・部分発生防除の欄を参照）に従って、薬剤散布を行う。

3 キウイフルーツ

- 1) 果樹の中で停滞水の影響が最も大きいので、排水には特に留意する。
- 2) 枝が過繁茂している場合は、枝管理を徹底し、果実の品質低下の防止に努める。
- 3) 果実軟腐病対策として、防除暦を参考に薬剤散布を行う。

4 カキ

- 1) 耐水性は強いが、停滞水によって根の活力が低下するので、排水に心掛ける。
- 2) 炭疽病対策として、防除暦を参考に薬剤散布を行う。

5 モモ

- 1) 徒長枝の間引き等による枝管理を行い、樹冠全体の日照を良好にする。
- 2) せん孔細菌病対策として、防除暦を参考に薬剤散布を行う。

6 オリーブ

- 1) 園内の排水に努める。
- 2) 炭疽病対策として防除暦を参考に薬剤散布を行う。

花 き

1 施設内管理

- 1) 昼間は十分に換気を行う。雨天時には、換気扇による換気、温風暖房機による間断送風（から吹かし）等を強制的に行う。
- 2) かん水は必要最小限に止め、こまめに行う。また、株元にかん水し、植物体に掛けないようにする。
- 3) 農薬による防除はできる限りくん煙等を取り入れ、噴霧器による薬液散布は必要最小限に止める。
薬液散布を実施する場合は、施設を密閉するまでに薬液が乾くようにする。
- 4) 生育や商品価値に支障がない限り、下葉や余分な枝は除去して、通風採光を図る。
- 5) 罹病部分はできる限り除去し、直ちに施設外へ搬出して処分する。
- 6) 寡日照が続く中で晴天は、急激な気象変化をきたし、葉焼け、茎折れ等を起こしやすいので、換気等により高温防止に努める。
- 7) 施設廻りの排水を徹底し、内部へ水が入り込まないようにし、根腐れ防止に努める。

- 8)パイプハウスなどで露地状態にしている場合は、雨よけのために屋根部を被覆する。
- 2 露地栽培の管理
- 1)ほ場内の水をほ場外へ排出するために、排水溝を整備する。
 - 2)肥料の流亡が予想されるので、葉色等を見ながら液肥の葉面散布など追肥を与える。
 - 3)雨天の間隙をぬってでも、薬剤防除に努め、病虫害の多発を防ぐ。
- 3 品目ごとの管理
- 1)キ ク
 - ①黒斑病、褐斑病、白さび病等、各種病害が多発するおそれがあるので、風通しをよくするとともに、薬剤による防除を徹底する。
 - ②親株ほ場は、できる限りビニール等で雨よけをするとともに、白さび病等の防除を徹底する。
 - ③雨天、曇天日の電照時間は、通常より1時間程度長めにする。
 - ④花首が徒長しやすい品種や先ごけ症の出やすい品種では、わい化剤を散布する。
 - 2)カーネーション
 - ①軟弱でしかも茎細に育っているので、整芽を徹底する。
 - ②灰色かび病、さび病の発生が予想されるので、防除を徹底する。さび病については、発生を見たら速やかに罹病部位を除去する。
 - 3)マーガレット
 - ①株の内部が蒸れやすくなるため、下葉や余分な枝は除去して、通風・採光を図る。
 - ②パイプハウスなどで露地状態にしている場合は、屋根部分のみビニール被覆して、降雨を防ぐ。
 - 4)その他草花類
 - ①灰色かび病等の多発が予想されるので、換気と防除を徹底する。
 - ②軟弱徒長に育っているので、かん水はやや控え目にする。

畜産

- 1 畜舎内外の環境整備
- 1)畜舎の周辺や運動場の排水溝の掃除をして排水に努める。
 - 2)畜舎内の通風と換気に努め、敷料は早めに交換する等して畜舎内の乾燥に努める。
- 2 飼料作物（トウモロコシ・ソルガム）
- 1)ほ場内の排水に努め湿害を軽減したうえで、適期収穫を心掛ける。
 - 2)全般に生育や登熟が遅延傾向となるが、特に高温条件が必要なソルガムの生育遅れが大きく、場合によっては減収となる。
 - 3)トウモロコシでは、絹糸抽出期から受粉期に日照不足になると不稔が多くなる。さらに雨天が続くと多湿になると、ごま葉枯病・根腐病などの病害や硝酸塩の蓄積が多くなるので注意を要する。
 - 4)トウモロコシの収穫期は、絹糸抽出期から起算して35～40日程度であるが、長雨・日照不足の場合、これ以上の日数を要するため、雌穂の堅さやミルクライン等を観察して適期収穫を図る。
 - 5)ソルガムは、高水分では良質なサイレージの調製が難しいので、乳酸菌等の添加剤を利用する。
 - 6)硝酸塩の蓄積が懸念される場合は、できる限り青刈り給与を避けてサイレージに調製するが、青刈り給与が必要な場合は、事前に検査機関で硝酸塩濃度の分析を行い、適正給与量を判断する。
- 2 飼料イネ
- 1)中干しが不十分な場合は、根の活性を維持するために間断かん水を徹底する。
 - 2)飼料イネ専用種は、品種によりいもち病や縞葉枯病等に対する耐病性が異なるので、ほ場で発生を確認した場合は、県の防除指針に基づき適切な防除に努める。
 - 3)農薬使用に当たっては、地域の農業改良普及センターの指導に従い、特に使用時期には留意する。
 - 4)飼料イネは、高水分では良質なサイレージの調製が難しいので、乳酸菌等の添加剤を利用する。